



ほ場を管理する（左から）長崎氏、岩瀬氏、山崎氏

概要

◆会社名・所在地

株式会社日本農業 代表取締役 内藤 祥平
東京都品川区（参入地：茨城県城里町）

◆参入年

令和6年2月

◆経営規模

リンゴ、キウイ等 88.7ha（うち茨城県城里町 梨・桃 0.5ha）

◆従業員数

正社員 121名（うち茨城県城里町 正社員3名）

◆事業内容

国の研究機関と連携し、初期収量が高く早期成園化が可能な日本初の樹形で、梨・桃の栽培に取り組み、輸出を主体とした新たな産地形成を図る。

1 就農相談までの背景

2016年11月に農業ベンチャーとして設立し、輸出を軸としたリンゴなどの果樹生産をメインとしていたが、近年、国外における梨・桃のニーズの高まりを感じ、関東近郊で、輸出を主体とした梨・桃のほ場を新規に開拓することを目指していた。

参入する農地を探す中で、「茨城県農業経営・就農支援センター（以下「支援センター」という。）」のホームページを見て、問い合わせた。

2 相談内容

革新的な栽培手法を積極的に採用しており、国の研究機関に技術指導を受けていた。また、販路は確保しており、事業計画は出来上がっているものの、農地が見つからない状況であった。

農地を確保し、早期に事業化を図るため、支援センターを通じて、荒廃農地の紹介や市町村との仲介などの支援をお願いしたい。

3 支援内容

●条件に合致した農地、市町村とのマッチング

農地の条件等の希望をヒアリングした上で、複数の市町村を紹介したところ、受入れに対する積極的な姿勢や作物を育てやすい風土、大規模にまとまった農地がある事など、様々な条件が重なり、城里町への参入が決定した。

●農地拡大に向けた支援

城里町では、今回参入した農地の他にも、県と連携して地権者の貸借意向の取りまとめ等を行っている。収集した農地情報を基に、同社の規模拡大意向に応じて、農地の紹介や受入れに向けた地権者への説明などの支援を行っている。

●町や関係機関と連携した支援

参入にあたっては、同社と組合の顔合わせの場などに城里町と共に同席し、地元の合意形成を促した。

また、普及指導センターや先進農家を紹介し、視察や栽培技術の習熟に向けた支援を行った。



城里町のほ場
日本初の樹形による栽培



定植した梨苗の状況を確認する山崎氏

今後の意気込み

町と県が連携して、手厚く支援いただいたことが茨城県への参入を決める一因となりました。特に城里町は、人、農地、環境等のあらゆる要素に可能性を秘めた土地だと感じています。

今後は作物を販売するだけでなく、私達の栽培ノウハウを他の新規就農者または新規参入法人に継承し、新たな産地の形成に取り組みたいです。

専属スタッフ所感

株式会社日本農業と城里町は、令和6年2月14日に「農業発展と地域の活性化に関する連携協定」を締結しており、今後、地域の農業の担い手としてご活躍されることと期待しています。

町や関係機関と連携し、円滑な企業参入に向けた支援を実施することができました。

今後も、相談者のニーズに応じた支援を継続するとともに、これから参入を検討する企業に対しても、同様の支援を行ってまいります。



高城直昭氏

概要

- ◆氏名・所在地
高城 直昭 栃木県宇都宮市
- ◆就農年
令和6年4月
- ◆経営規模
いちご 0.15ha
- ◆従業員数
なし
- ◆事業内容
いちごの栽培に取り組む。

1 就農相談までの背景

20年後の自分の健康面や仕事について考えていた際、妻の実家の農業を手伝ったことをきっかけに、農業を始めたと思った。

妻の地元である栃木県での就農を考え、ネット等で情報を集めた結果、「とちぎ農業経営・就農支援センター」でオンライン就農相談を実施していることを知り、連絡をとった。

2 相談内容

「栃木県で農業を始めたい」と大まかな構想があったため、ネット等を活用して情報を集め始めた。

しかし、県外出身であり、農業の知識がほとんどなかったことから、栃木県農業の状況や農業を始めるにあたっての技術面と資金面の課題解消方法、就農にあたり何から始めたら良いかなどの専門的な観点からの助言が必要だと実感したため、相談を依頼した。

3 支援内容

●就農地や研修の相談対応

県外出身であり、農業未経験であったことから、県内の産地の状況や農地取得・生活資金面等の農業を始める上で必要な情報を提供するなどの相談対応を就農専属スタッフが行った。

●研修機関等の紹介

相談者の希望を踏まえ、J A や市町ごとの研修情報や産地情報を提供し、就農希望地を選定した。

あわせて、相談者の同意の上で、就農専属スタッフから相談者の就農希望地の就農サポートチーム（宇都宮市、宇都宮市農業公社、河内農業振興事務所）へ就農相談カルテを共有した。

●関係機関との連携による取組

県の認定研修機関である宇都宮市農業公社において、実践的な農業技術や農政にかかる基礎知識、農業経営者としての自立に向けたカリキュラムや農家派遣研修を受けた。

●独立自営就農に向けた支援

研修中に、地域の就農サポートチームが農地や施設の取得、資金確保、青年等就農計画作成等の支援を行った。

地域と連携した支援により、農地が確保され、就農に向けた準備が整った。



相談対応の様子



研修会の様子

今後の意気込み

粘土質の土地で、排水性向上など地盤改良が必要と感じている。土づくりをしっかりと行い、計画収益の達成に向けて頑張りたい。

周囲の先輩農家から助言をいただきながら、いちご栽培に真摯に取り組んでいきたい。

専属スタッフ所感

就農相談時の積極的な姿勢から就農への強い意欲を感じました。県外から移住しての就農には大きな決断が必要だったと思いますが、オンライン、電話、面談と相談を重ねていくにつれて、栽培品目が決まり、目指す方向性が固まりました。研修機関のサポートと本人の努力によって就農にたどり着いたことは本当にうれしく感じます。就農後も地域の就農サポートチームを中心に技術や経営面について支援していきます。



研修先で指導を受けるM.H氏（写真左）

概要

◆氏名・所在地

M.H 高崎市

◆研修開始年

令和6年4月～令和7年3月

◆研修内容

有機野菜での就農を希望し、現在、コマツナ、ズッキーニ、ニンジン等の有機栽培を行う農業者の下で1年間の長期研修に取り組む。

1

就農相談までの背景

東京都で生活していた際に、スーパーに並ぶ野菜の産地を見て、今後の日本における食料の自給がどうなっていくのかが気になり始め、いずれは循環型農業による有機野菜の栽培を行いたいと考えた。しかし、何から始めれば良いか分からなかったため、ネットで調べたところ、有機栽培を行っている生産団体を知り、その団体から「群馬県農業経営・就農支援センター（以下「支援センター」という。）」を紹介された。

2

相談内容

「実家がある群馬県で有機野菜を始めたい」と大まかな構想はあったが、農業の知識や経験がほとんどなかったので、技術習得のために長期研修を行いたい。また、就農までの手順や活用できる支援策を教えてください。

3

支援内容

●オンライン就農相談

相談者は東京都に在住しながら研修開始の準備を進めていたため、オンラインでの就農相談を実施した。メールや電話だけでは分からない本人の表情や意気込みなどをきめ細かに確認することをしっかりと心がけることで、相談者が本当に気になっていることを機動的に情報把握するなどの相談対応を行った。

●農業体験事業の紹介

農業経験がほとんどなかったので、県主催の農業体験事業を紹介し、就農希望地で有機農業に取り組む農業者の下で農業体験を行った。これにより就農に対する想いがこれまで以上に強くなり、長期研修に向けて話を進めることになった。

●営農計画作成支援

支援センター及び県で、何度も相談者と打合せを重ね、就農するまでのスケジュールや作目の選定、作目の収支等を詰め、就農計画書等を作成した。

●研修機関等の紹介

相談者が希望する有機野菜の栽培を行っている研修先農家を選定し、研修開始に向けて研修計画や就農計画の作成支援を行った。



農業体験事業の様子



研修先で栽培されている有機野菜

今後の意気込み

ネットの情報だけでは分からないことも多く、実際に窓口に行って何度も相談することでしか得られない情報が多くありました。

研修を終えて就農した後は、自らの生産量を増やすだけでなく、地域のグループの人たちと共に地域農業が発展していけるように頑張りたいです。

専属スタッフ所感

就農相談に来る多くの方が「農業未経験」または「体験程度」です。就農までの準備を丁寧に行うことでしっかりと農業に定着していただき、更なる経営発展にもつながります。

相談者はご自身でも事前に準備されていたため、就農におけるビジョンが明確化されており、こちらからの支援に対しても意欲的に取り組まれていました。

地域の担い手となっていただけるように、今後も経営相談を通じて引き続きフォローしていきます。

サラリーマンから地域農業の担い手を目指して

雇用就農

その他（研修）



法人時代の仲間と（右から2人目が細野一司氏）

概要

◆氏名・所在地

細野 一司 埼玉県加須市

◆就農年

令和5年8月

◆経営規模

水稻 12ha、麦類 6ha

◆従業員数

なし

◆事業内容

水稻（移植・乾田直播）と麦類（小麦・二条大麦）の栽培に取り組む。

1

就農相談までの背景

非農家出身であるが、近所に住む伯父の水稻栽培を幼少期から手伝っており、農業に関心があった。

高校卒業後、運送業に従事した約20年間で、伯父や地域の農業者の高齢化の進展を実感し、地域農業の担い手となるべく、就農を決意した。

当時42歳と年齢的なこともあり、計画的に就農を実現するべく情報収集していたところ、「埼玉県農業経営・就農支援センター」を知り、サテライト窓口である普及指導センターへ相談することにした。

2

相談内容

伯父の手伝いで水稻栽培に関する技術や知識は多少あったものの、就農にあたってはより高度かつ効率的な栽培技術が必要であると思ったため、研修受入先を紹介してもらいたい。

また、農地の取得方法や、補助事業等の行政による就農支援制度について相談したい。

3

支援内容

●就農に関する情報提供

農地の取得方法や就農支援制度など、就農にあたり必要な情報について情報提供を行った。

●研修先の紹介

研修生や社員を育成し独立就農を支援した実績を持ち、かつ社長が県指導農業士である加須市内の農業法人に対し、研修先としてマッチングを行った。

同法人に2年間研修生として雇用され、水稻・麦類の栽培の基礎から大型農業機械の操作方法を習得した。

●関係機関との連携による独立就農支援

法人からの独立就農にあたり、法人に在籍している間から農地や機械の取得、青年等就農計画の作成等について、市や関係機関と連携し支援を行った。

また、国の補助事業を活用してトラクタを導入するための支援を行った。



農業法人での研修の様子



相談対応の様子

今後の意気込み

普及指導センターで研修先として紹介してもらった農業法人で、これまで経験のなかった乾田直播や麦類の栽培も含め、2年間にわたり多くの技術を習得できました。現在就農2年目ですが、法人在籍時の仲間のサポートもあり、順調に規模を拡大しています。

今後は、自分がお世話になった法人のように、新たな人材を育成し、この地域の担い手を増やしていきたいです。

専属スタッフ所感

相談者は、水稻栽培の経験があったものの、農業法人で謙虚に新たな技術を学び、そして社長を中心とした「仲間」を得たことで、就農後の経営を軌道に乗せることに成功しました。また、高齢化が進む地域農業への危機感とそれに対する熱い思いが共感を呼び、周囲のサポートを得る一助にもなっていると感じます。

今後も、栽培技術や経営に関する支援を行い、更なる規模拡大・経営発展に向けてフォローしていきます。



鳥海阿生乃氏

概要

- ◆氏名・所在地
鳥海 阿生乃 千葉県富津市
- ◆就農年
令和6年5月
- ◆経営規模
露地野菜（小松菜・とうもろこし等） 0.2ha
- ◆従業員数
家族労働 2名
- ◆事業内容
露地野菜の栽培に取り組む。

1 就農相談までの背景

実家は兼業農家であるが、就農はせずに、調理師 免許を取得して、東京都内の調理師学校に勤めていた。いずれは、地元の富津市に戻り、調理師として働くことを考えていたが、調理師学校の体験実習で農作業を行う機会があり、改めて農業の楽しさや重要性に触れて、今後も農業に携わっていきたいと感じるようになった。その想いを持って、栽培技術等を学ぶために千葉県立農業大学校の研修を受講し、座学や実技、農家研修を通じて知識や技術を習得した。

2 相談内容

主要な栽培予定品目である「小松菜」については、地域での生産が少なく、青年等就農計画を作成するために必要な経営収支状況などが不明だったことから、「千葉県農業経営・就農支援センター」に相談した。

また、経営開始資金や経営発展支援事業の活用方法や借受予定農地の土壌特性に応じた土づくりに関する相談を行った。

3 支援内容

●栽培品目の相談対応

栽培を予定している小松菜について、県内で生産が盛んな地域の経営収支の状況等について情報提供を行った。

●関係機関との連携による取組

青年等就農計画の精査・検討や今後の支援方針の情報共有を図るために、市やJAを交えて、本人と打合せを行った。

●地域の仲間づくりや資質向上に向けた取組

営農開始後は、経営者としての資質向上や地域の仲間づくりが重要となることから、新しく農業を始めた青年農業者を対象に普及指導センターが開催しているセミナーへ参加を促した（令和6年度からセミナーに参加予定）。

●機械導入に向けた関係機関による支援

相談者がトラクターの購入を検討していたことから、関係機関で連携し、支出を抑えて導入する方法を検討・提案した。



圃場での相談の様子



栽培管理を行う鳥海氏

今後の意気込み

現在の栽培面積は20aですが、将来的には60a まで栽培面積を拡大し、直売所だけでなく市場出荷や給食センターへの納品など、販路を増やしていきたいと考えています。また、今後農業を続ける中で様々な課題に直面すると思いますが、あきらめずに続けていきたいです。

専属スタッフ所感

相談者は営農を開始するにあたって、借りる圃場の特性に応じて栽培品目を選定するほか、作付のスケジュールも計画的に考えています。また、土づくりにも積極的に取り組んでおり、営農に向けた準備を丁寧に進めています。今後の営農計画として、規模拡大や栽培品目数の増加等を検討していることから、関係機関と連携した上で、営農段階に応じたフォローを行います。



トマトハウスでの今秀之氏

概要

- ◆氏名・所在地
今 秀之 神奈川県厚木市
- ◆就農年
令和6年4月
- ◆経営規模
施設トマト 4a、露地野菜 17a
- ◆従業員数
なし
- ◆事業内容
施設トマトと露地野菜栽培に取り組む。

1 就農相談までの背景

農業従事者の減少や高齢化という社会課題を知り、職業として農業に興味を持った。まずはボランティアとして参加し、農業を知ることから始めた。その経験を通じて、人が生きていく上で絶対に必要な食を支え、消費者に喜びを感じてもらえることができる魅力ある職業だと思いを強くし、本格的に就農を考えるようになった。

「農業をはじめる.JP」で調べ、神奈川県農業会議等に連絡したところ、「神奈川県農業経営・就農支援センター」を紹介された。

2 相談内容

施設でトマトを栽培したいと思い、農家等での研修、農業法人での雇用就農又は神奈川県立かながわ農業アカデミーに入校して研修を受けるなど様々な選択肢がある中で、どのように技術の習得をしたらよいか相談した。

かながわ農業アカデミー入校後は、就農地の情報や青年等就農計画の策定方法について、アドバイスを受けた。

3 支援内容

●研修機関等の情報提供

神奈川県における施設トマトの収益性・トマト農家の現状、新規参入者の状況等について情報提供した。

また、研修先としてかながわ農業アカデミーのカリキュラムや取組等を紹介したほか、農家や農業法人で研修する場合のメリット等を説明したところ、かながわ農業アカデミーに入校して研修することとなった。

●関係機関との連携による取組

就農希望地に所在する厚木市都市農業支援センターと連携・情報共有し、同センターの支援を受けて、居抜きハウス4aのほか、農地17aを借りることができた。

●青年等就農計画の作成支援

厚木市での就農に向けて、販売方法や農業所得の算出、単価の設定等についてアドバイスを行い、就農計画の作成を支援した。

今後の意気込み

ネット情報だけでは分からないことも多く、実際に窓口に行っても何度も相談することでしか得られない情報が多くありました。研修や実際の現場で得られる知識は多く、深く学ぶことで自分の力としていくことが必須だと感じました。

農業経営はまだ手探り状態ではありますが、関係者の方に助けをいただくことも多く、大変感謝しております。まだまだ駆け出しな状態ではあるので、これまでに得た知識やこれから学んでいくことを最大限に活かしていきます。

専属スタッフ所感

就農相談に来る多くの方が「農業未経験」または「体験程度」です。

相談者は施設トマトを栽培したいという強い希望をもっていましたが、トマト栽培は未経験でした。かながわ農業アカデミーに入校後、経営ビジョンを達成するため意欲的に研修に取り組みながら、農地探し等の就農活動に励んだことで、卒業後速やかに就農することができました。

今後も地域の担い手としてステップアップできるように、応援しています。



袋かけを行うM氏

概要

◆氏名・所在地

M氏 山梨県笛吹市

◆研修開始年

令和6年1月

◆研修内容

モモ栽培での就農を希望し、農業振興公社での2年間の長期研修に取り組んでいる。

1

就農相談までの背景

前職で生花店に勤務し、取引先の生産者を訪問した際にものづくりに対する生産者の姿に感銘を受け、農業に興味を持った。その後、研修指導者となるモモ農家と出会ったことをきっかけに、モモ栽培を行いたいと考えようになった。

何から始めれば良いか分からなかったため、「山梨県農業経営・就農支援センター（以下「支援センター」という。）」へ相談した。

2

相談内容

笛吹市のモモ栽培農家でアルバイトを行っているが、今後**独立就農して、本格的にモモ栽培を行いたい。**

しかし、技術面や資金面に課題があることから、就農に向けた栽培技術の習得方法や支援制度等について具体的に知りたい。

3

支援内容

●研修機関等の紹介や研修先の決定

支援センターでは、栽培技術習得研修や就農準備資金、経営開始資金、認定新規就農者制度について説明した。

また、栽培品目と就農地が定まっていたことから該当地域を管轄する支援センターのサテライト窓口である普及指導センターを紹介し、普及指導センターでは研修制度の要件確認とモモ栽培技術を学ぶための派遣研修先となる農業振興公社との調整を行った。

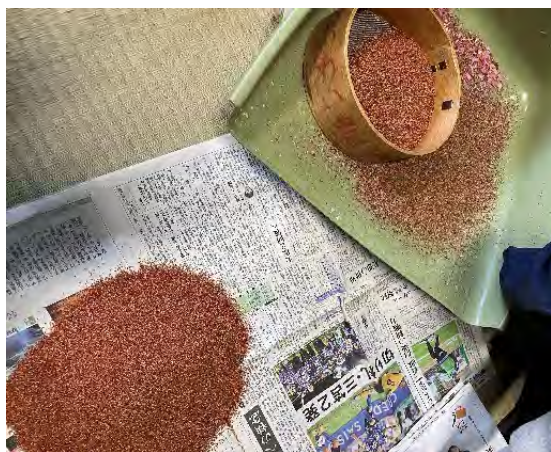
その後、普及指導センターで研修計画作成支援を行い、農業振興公社での研修を開始した。

●関係機関との連携による取組

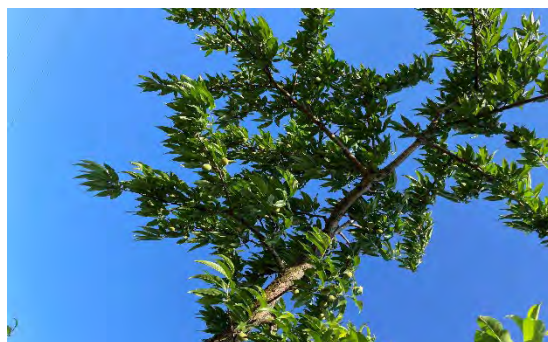
普及指導センターと農業振興公社が、研修生や研修指導者に対する現地での**定期的な研修状況の確認や個別相談対応を随時行った結果、順調に栽培技術を習得していることを確認できた。**今後も市町村等と連携して、引き続き就農に向けて支援していく。

●就農市町村の決定

派遣研修先の研修指導者からの紹介で今後借りることのできる農地の目処が立っており、また地域とのつながりも良好であるため、2年間の**研修終了後には地域への円滑な定着が期待できる。**



研修先での花粉採取作業



研修先での摘果作業

今後の意気込み

農業に関して何もわからない所から、就農に向けた手順を丁寧にご教示頂き、一步を踏み出す事ができました。

まだ知識・経験不足で手探り状態ではありますが、研修を通して成長していけるよう、誠心誠意取り組んでいきたいと思っています。

専属スタッフ所感

支援センターは就農希望者のワンストップ窓口となっています。就農相談に来る方は、栽培品目や就農地が決まっていな方、移住まで検討している方、既に農業の方向性は定まっているが支援制度を知りたい方、農地の確保を図りたい方等様々であるため、相談内容に応じ、普及指導センター、市町村、JA等に繋げています。

今回の相談者は内容が具体的であり、意欲が高かったため、いち早く実践的な研修に入れるよう対応しました。



寝食をともにしている農業大学校研修部の仲間たちと
(後列中央が高橋大輔氏)

概要

◆氏名・所在地

高橋 大輔 長野県小諸市

◆研修開始年

令和6年4月

◆研修内容

長野県農業大学校研修部において、作物や果樹、野菜について、座学と実習を組み合わせ、基礎的な農業の経営知識と栽培技術の習得を目指す。高橋氏は果樹を専攻しており、リンゴやブドウ等の栽培管理や経営について学んでいる。

1

就農相談までの背景

会社勤めもひと段落した中、元々農業に関心があったことから、定年退職のない農業に、体力があるうちに取り組みたいと考え、就農を決意した。首都圏に近いということ、果樹と言えば長野県ということから長野県での就農を考えた。就農するにはどうすればよいか、インターネットで調べていた際に、「長野県農業経営・就農支援センター（以下「支援センター」という。）」等が開催する就農相談会の存在を知った。

2

相談内容

「本格的に長野地域で果樹栽培に取り組みたい」という想いをもって相談会に参加した。

その上で、具体的な栽培品目及び就農市町村の選定や研修制度について相談したい。

3

支援内容

●関係機関との連携による相談活動

4月に長野農業農村支援センターが、オンライン上で相談者に相談対応し、農業体験・研修等の情報提供を行った。

7月に新宿で支援センターや関係機関等が共同で開催した「長野県市町村・JA合同就農相談会」において、県や長野地域など複数のブースで相談対応を行った。各相談会では、農業ガイドブック「農活in信州」を用いて農業のリスク、就農へのステップ、研修制度、助成事業等を説明した。また、相談会では体験の重要性も説明し、県の体験研修などを紹介した。

その後、県は就農地域をアドバイスし、相談を重ねることで、相談者の覚悟が深まり、栽培品目や就農地域が絞られていった。

●体験研修の受け入れ

長野県では、就農後の早期の経営確立を目指し、里親農業者による実地研修と農業大学校研修部での集合研修を組み合わせた新規就農里親研修を実施している。

支援センターの紹介により、里親研修の前段として、県農業大学校が実施している基礎的な農業に関する知識や技術を取得するための里親前基礎研修を受けることになった。

●研修先の決定

村主催の農業体験に参加し、受入農家が長野県農業大学校の出身で、実習を通じて基礎を学べるとのアドバイスを受け、見学等を通じて研修先を決定した。



長野県市町村・JA合同就農相談会の様子



リンゴの摘果作業

今後の意気込み

今は子供の学校の関係で、家族は千葉県に残っていますが、ゆくゆくは家族も長野県への移住を考えています。

自分が作ったリンゴやブドウを多くの人に味わってほしい。農業経営を軌道に乗せ、楽しく、長く続けていきたいと思っています。

専属スタッフ所感

当初はまだ漠然とした相談でしたが、相談を重ねることでイメージが明確になり、品目や地域が絞られていきました。

支援センター、県現地機関（普及指導センターと農業大学校研修部）、就農候補地の自治体が連携して相談に当たりました。相談・体験・研修のステップを踏んでおり、着実な就農が期待されます。研修機関と現地機関との連携を密にし就農を支援していきます。

地域の関係機関が連携した ワンストップ体制による新規就農支援



指導農業士による相談者への栽培指導

概要

- ◆氏名・所在地
岩本 賢 静岡県沼津市
- ◆就農年
令和7年1月（予定）
- ◆経営規模
みかん 0.3ha（予定）
- ◆従業員数
臨時アルバイト 若干名（予定）
- ◆事業内容
温州みかんの栽培に取り組む予定である。

1 就農相談までの背景

大学生の頃から、みかん農家になろうと考えており、特に静岡県沼津市西浦地区の風景に惹かれていた。そういった思いから、大学を卒業して数年間、関西の農業法人で農業に従事しながら、西浦地区での就農への道を探ってきた。

「静岡県農業経営・就農支援センター（以下「支援センター」という。）」へ相談するとともに、普及指導センター及びJAとの相談を経て、自営就農の意思を固めた。

2 相談内容

自営するために必要な経営面積や産地の様子などはJAから聞いていたが、みかん農家として自営就農するまでの道筋はよくわからなかった。そのため、具体的にはいつまでに必要な資材や土地を確保するか、自己資金が必要か、生活はどうするか、研修のタイミングはいつかなどについて情報を求めた。

3 支援内容

●研修機関等の紹介

相談者の希望する作目や地域が決まっていたため、研修に向けた制度紹介や具体的な手続きなどの相談対応を主に行った。

就農希望地域には新規就農希望者をサポートする「なんすん地域受入連絡会」が設立されており、JAや指導農業士、市、県が協力して支援する体制が整っている。

「なんすん地域受入連絡会」を紹介し、相談することを勧めた。また、研修が円滑に進むように、支援センターは現地見学会を開催した。

●関係機関との連携による取組

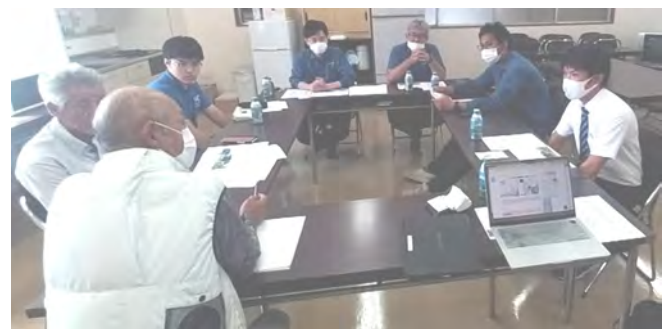
相談者が就農して農業所得を得るまでの期間は短い方が好ましく、研修や各種支援制度の申請手続きなどは、短い期間で円滑に進める必要がある。

そのため、「なんすん地域受入連絡会」は相談者に対して、農家研修や農地紹介、制度資金申請の指導等について、JA、市、県、それぞれの立場から包括的に支援してきた。

支援センターは、サポートチームの一員として相談者に対して、研修事業や農地バンク事業としての農地斡旋等の支援を行い、連絡会運営に関する助言等を行った。



相談者と関係機関による就農候補地の調査



連絡会による就農スケジュールに関する打合せ

今後の意気込み

ネット情報だけでは分からないことも多く、実際に現場や窓口に行って何度も相談することでしか得られない情報が多くありました。

まだ農業技術を学んでいる段階ではありますが、就農後も経営相談を通じて関係者の方に助けていただけるとのことので、頼もしく思っております。

専属スタッフ所感

就農相談に来る多くの方が「農業未経験」または「体験程度」です。就農までの準備を丁寧に行うことでその先の経営発展にも繋がります。

相談者はみかん農家になるという目標を持って、農業法人で経験を積んでおり、一定の農業技術を有していました。

また、地域側も受入連絡会を設立し、関係機関の情報共有や支援の役割分担を明確にすることで、スムーズな就農に繋がる事が期待できます。今後も継続してフォローを行っていきます。